

4 前作の違いで「飼料イネ」の収量はどうかわかるか？

ねらいと成果

近年、海外での口蹄疫などの疾病や輸入乾草による中毒の発生により、輸入粗飼料の安全性が懸念され、また、国際的な飼料価格の高騰により、国内産飼料の生産拡大への要望が高まっている。一方、国内では水稲作付面積の減少から農地の荒廃が進み、水田の有効利用が求められている。県北部では、こうした水田への代替作物として「飼料イネ」に注目し、地域に適した品種選定及び生産体系の確立並びに但馬牛への給与技術について検討している。

本試験では飼料イネの効率的な作付け体系として、前作の肥効が残りやすく、コシヒカリ栽培が困難な豆跡、岩津ネギ跡での飼料イネ施肥法を検討し、豆跡では稲跡と同量、ネギ跡ではほぼ半量の施肥で、安定生産が可能であることを明らかにした。

内容

食用米として育成された「兵庫ゆめおとめ(仮称)」を飼料用として用い、前作に水稲、大豆及び小豆、岩津ネギを作付けしたほ場で、2005、2006年に施肥試験を行った。140日緩効性肥料を80%含む肥料を基肥に施用し、施肥量は10a当たり窒素(以下N)成分で、稲跡と豆跡では7.5及び10kg、ネギ跡では0、2.5及び5kgとした。

その結果、ネギ跡のN5kg区の一部で倒伏がみられた他は大きな障害はみられず、いずれの施肥法で

も収穫に支障はなく、優良なサイレージを作ることができた。収量では、ネギ跡のN0kg区(無施肥)で劣り、稲跡のN7.5kg区及びネギ跡のN2.5kg区でやや劣る傾向がみられたが、その他の区はほぼ同等であった(図1)。

次に、飼料成分として乾物中のTDN(可消化養分総量)含量をネギ跡のN5kg区と稲跡のN7.5kg区、N10kg区とで比較した。それぞれの時期別にみると、ネギ跡のTDN含量は稲跡に比べ劣る傾向はあるものの、収穫時期による差の方が大きく、前作の違いによる差はそれほど大きくないと考えられた(図2)。

以上の結果より、稲跡で10a当たり窒素(N)成分を10kg程度施用できるほ場では、豆跡ではほぼ同量の7.5~10kg、ネギ跡ではほぼ半量の5kg程度の施肥で同程度の収量が得られ、実用上問題はないと判断された。

今後の方針

現在、収穫した飼料イネをホールクロップサイレージにして但馬牛に給与する試験を行っており、生産から給与まで一貫した技術体系を目指した、土地利用型畜産経営システムを確立する。

岩井 正志 (農業技セ・作物・経営機械部)
(前 北部農技・農業部)
(問い合わせ先 電話: 079-674-1230)

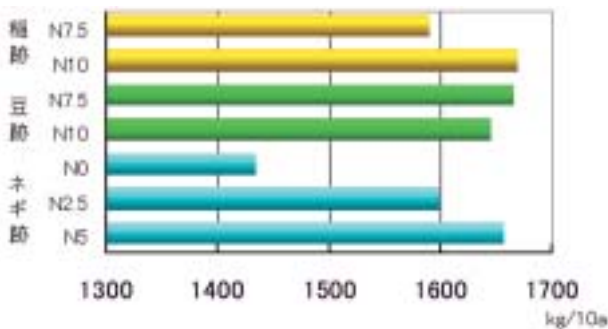


図1 前作と施肥量が飼料イネの黄熟期全風乾重に及ぼす影響

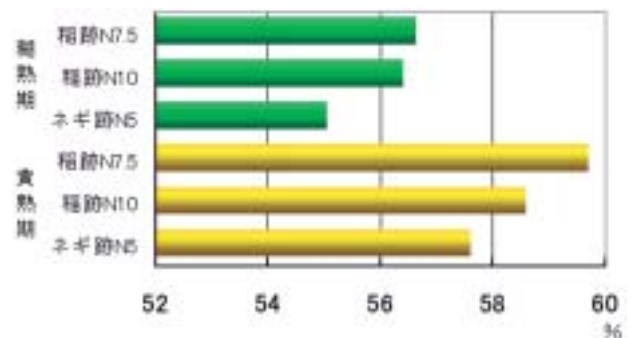


図2 収穫時期別の飼料イネ乾物中TDN含量